

農林水産大臣賞受賞

自然と笑顔が人と人を繋ぐ、
グリーン・ツーリズムの町ふるさと大森

受賞者 おおもりまち 大森町グリーン・ツーリズム推進協議会 すいしんきょうぎかい
あきたけんよこてし
(秋田県横手市)

■ 地域の沿革と概要

大森町グリーン・ツーリズム推進協議会がある横手市は、平成 17 年に、
ますだまち ひらかまち おものがまち
増田町、平鹿町、雄物川町、大森町、
じゅうもんじまち さんないむら たいゆうむら
十文字町、山内村、大雄村が合併して
できた市である。東は奥羽山脈、西は
出羽丘陵に囲まれた横手盆地の中央
に位置し、総土地面積は 6 万 9 千 ha
となっている。

市内を流れる雄物川やその支流の
横手川、なるせ みなせ
成瀬川、皆瀬川の流域には広
大で肥沃な耕地が広がり、土地利用型
農業に恵まれた条件が整っており、農
家数や農業産出額は県全体の 15% を
占め、農業が主要な産業となっている。

また、県内有数の豪雪地帯であり、
一部の地域は特別豪雪地域に指定さ
れるなど、冬期間の積雪量は多く、春
には豪雪がもたらす豊富な雪解け水
となって田畑を潤している。

市内には、南北に国道 13 号及び湯
沢横手道路、東西に国道 107 号及び秋
田自動車道が通り、交通の要衝として
県南部の中心都市となっている。こう
した高速交通ネットワークの整備に
より、都市住民と農山村の住民が相互
に行き交うライフスタイルが可能と
なったことから、自然環境や生活文化、
伝統産業等の地域資源を活用した
様々な共生・対流の取り組みが地域の

第 1 図 位置図



※ 白地図 kenMap の地図画像を編集

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容	
地区の規模	旧市町村単位の集団（8 集落）	
組織の性格	機能的な集団	
農 家 率 (内訳)	54.8 %	
	総世帯数	2,043 戸
	農 家 数	1,119 戸
販売農家数 (内訳)	944 戸	
	専業農家	108 戸
	1 種兼農家	92 戸
	2 種兼農家	744 戸
主要作目 (作付面積)	水 稻	1,080 ha
	野 菜	114 ha
	果 樹	80 ha
農用地の状況 (内訳)	耕地計	1,810 ha
	田	1,510 ha
	畑	298 ha
	樹園地	80 ha
	耕地率	26.1 %
	農家一戸当たり農用地面積	1.7 ha

重点的な対策として位置づけられている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大森町グリーン・ツーリズム推進協議会が所在する旧大森町は、横手市の北西端に位置し、周囲には出羽丘陵の山林が広がり、東端を雄物川が流れている。

日当たりの良い緩やかな傾斜地には、国産ワインの中でも高いクオリティを誇っている「大森ワイン」用のぶどう畑が広がっている。

また、小さな沢には先祖から受け継いできた棚田も広がっている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 町が中心となった都市農村交流活動

旧大森町では、昭和 50 年代頃から町役場が中心となり、地元 J A の野菜部会やしいたけ部会などのメンバーのほ場に首都圏の消費者を招き、農業体験を行う活動を始めた。

イ 生活研究グループ協議会の活動

農村の女性で構成していた旧大森町の生活改善グループは、地域内に複数存在していたが、メンバーの高齢化などに伴い、活動の停滞が顕著になっていた。

そこで平成 4 年、活動を活性化させるため、複数の生活改善グループから主要なメンバーを吸い上げて町一本のグループに統一し、会員 40 名からなる大森地域生活研究グループ協議会（以下「グループ」という。）を設立した。グループは、都市の消費者との交流に積極的にチャレンジすることを目指し、役場と連携しながら、次のような活動を展開した。

平成 5 年、同一の地名が縁で東京都大田区の J R 大森駅前商店会との交流が始まり、平成 6 年には J R 大森駅前商店会主催の「第 9 回おおもりたままたまつり」に参加し、農産物の販売を通じた都市住民との交流を行った。

平成 8 年、大田区主催の区民祭り「O T A ふれあいフェスタ」に参加し、農産物の販売に加え試食提供等を行った。

平成 9 年、新たに京浜急行大森町駅前商店会「^{きょうえい}共栄会」と交流を開始した。グループ員が共栄会主催のサマーフェスティバルに参加したことで、今度は、共栄会が大森町の産業祭に参加するなど、相互の交流が始まった。

平成 10 年、都市農村交流の先進的な取り組みを行っている「わらび座」（秋田県仙北市）から、都内中学生の農業体験の受入依頼があり、グループ員が中心となり対応した。農業とはほど遠い環境で育った子ども達との交流は緊張したもの、次第に子ども達も心を開き、お互い本来の笑顔を見せてくれるようになった。

平成 13 年、大田区と大森町両地域のライオンズクラブが交流を開始し、夏休みに大田区大森町から子ども達が田舎体験にやってくるようになった。

ウ 「味美会」の活動

グループでは、目的ごといくつかの小グループに分かれた活動を始めていた。消費者との交流の重要性を肌で感じたメンバー3人が、都市の消費者と定期的に会うことで、触れ合いを深めたいとの思いを強め、平成11年4月、農産物や加工品を提供する「味美会」を発足した。農産物の提供先は県都秋田市と決め、買いやすい値段とフットワークが効くよう「1,000円のパック（野菜等）をメンバーの軽トラックで宅配する」形でスタートした。消費者15人で始まったこの活動は、3ヵ月後には口コミで50人に増え、以後年々増加し、平成13年に100名、平成15年には120名に宅配するまでになった。それに伴い、当初は不定期だった宅配を、2週間に1回、さらには毎週行うなど交流の頻度も高まった。



写真1 味美会 1,000円パック

この宅配活動は、平成15年頃には相互交流に発展し、グループ員が秋田市の消費者からパンづくりを教わったり、年数回、消費者を大森町に招いて交流会などを行うようになった。

エ 先進地視察と協議会の設立

こうした動きが積み上げられたことにより、「町の取組」・「生活研究グループ協議会の取組」・「味美会での取組」をあわせて、地域のグリーン・ツーリズム活動体制を確立したいとの気運が高まった。

そこで平成11年から数回にわたり、町の助成を受けて、グループ員数名が渡欧し、ヨーロッパ型グリーン・ツーリズムの視察を行うなど勉強を重ねた結果、ヨーロッパの取組にいきなり追い付くのではなく、大森の地に足をつけた地道な活動を積み上げることを確認して、平成14年にグループ員を中心とした17人のメンバーとJA等の農業関係団体、町商工関係団体などで「大森町グリーン・ツーリズム推進協議会」（以下「協議会」という。）を設立し、同年4月から事業を開始した。

オ JA、商工団体等の脱退

協議会設立後、平成17年までに、これまで相互に協力し合ってきたJA等の農業関係団体、町商工関係団体から、目指す方向の違いにより脱退したいと申し出があった。危機感を感じた会員達からは、「百姓だけでこの後どうしていくのか」との声も出たが、これまでの活動や、様々な交流を通して学ばせて

もらったこと、出会った子ども達から勇気や元気をもたらしていることなどを再認識し、自分たちで活動の活路を見いだすことにした。

また、これまでの活動を通して、2名の会員がグリーン・ツーリズムインストラクターの認定を受けたり、地域特産品開発のため加工所を開設した会員も現れた。このような会員の意欲向上により、地域全体を元気にすることが、会員達の最も臨んでいることだと気付いた。

こうして、「子ども達を商売道具にはしない。大森のまごころのこもった受入を！」をモットーとし、年に数回、50～100人の修学旅行生の受入を行う形で協議会活動の立て直しをすることができた。

カ 農家民宿の開業

平成21年11月には、会員の一人が新たな取り組みとして「農家民宿 仁真園^{じんしんえん}」の営業を開始した（横手市では初めて）。

仁真園では、ポニーや鶏、ウサギなどを飼育しており、ポニー乗馬体験など、特徴あるメニューを揃えている。農作業とはまた違った楽しさを提供している仁真園は、交流活動になくってはならない存在になっている。



写真2 ポニー乗馬体験

キ 棚田オーナー制度の活用

平成22年には、県事業を活用して、「棚田オーナー募集ツアー」を展開している。年4回、棚田での農作業や交流イベントを通じて、地区住民とともに棚田を保全していくサポーターを募集するもので、協議会として農地保全に一步踏み込んだ活動を開始した。

事業を展開する地域は、12戸が先祖から受け継いできた13haの棚田を守り続けている八沢木塚須沢集落^{やさわぎつかすざわ}であり、今回の事業を進めることで協議会の活動に賛同し、新たに会に加入した者もいる。



写真3 塚須沢集落の棚田

ク その他の活動の広がり

子ども達の受入回数も会員も着実に増えていることから、近隣地域と一緒にあって受入を拡大するための勉強会を開催するなど、大森地域にとどまらず、横手市全体での受入体制整備に向けた動きを進めている。

(2) むらづくりの推進体制

ア 協議会の組織体制、構成員の状況

体験の受入れ依頼等は、横手市大森地域局が窓口となり受け付け、会長に情報が集約される。会長は、協議会幹部と相談の上で、受入れの可否や、どのメンバーに依頼するか割り振りなどを行い、全体を仕切っている。

協議会のメンバーは現在 30 名となり、一度に 80 名前後の農業体験希望者等を受入れることが可能となっている。

イ 協議会と連携してむらづくりを行う他の組織・団体及び行政との関係

平成 21 年から、受入れ時のイベントとしてそば打ち実演などをお願いした NPO 法人「森のそば」とは、今後の活動時においても連携することとしている。

また、地域の宿泊施設である「保呂羽山少年自然の家」が行っている創作活動（竹ばし、竹笛、竹とんぼ、自然素材工作、エイ夙、ラミネートしおり）、陶芸、うどん打ちなどの出前講座や、地域の造り酒屋である「備前酒造」の酒蔵見学など、他の団体等との連携により、多様なメニューを構築することが出来るようになった。

第 2 図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 体験メニューの豊富さに裏付けられたグリーン・ツーリズムの展開

小中学校修学旅行等の農業体験受入れを中心に、大田区との相互交流や秋田市の消費者への食材提供等、幅広い活動を展開している。

また、農作業体験に加え、地元食文化の紹介や、乗馬、縄ない、里山体験などのメニューを加えるなど、年々活動の内容が発展し、それがリピーターを生むなど、県内のグリーン・ツーリズムのモデル的な存在となっている。

(2) 旧町内の各組織が連携し、町全体で体験型交流を振興

従来から行政主導で行われてきた都市との交流活動に加え、生活研究グループ全体の活動と小グループでの活動、協議会設立後の農業体験受入れ開始など、いくつもの潮流を束ねて、地域でのグリーン・ツーリズムの太い流れとしている。

それ以後も、農村女性の活発で柔軟な発想力を活かし、少年自然の家が行っている出前講座、NPO法人が行っているそば打ち体験など、別の流れで行われていた活動を次々に巻きこみながら取組を充実させている。

今では行政は完全に裏方にまわっており、協議会員の主体的な活動が町全体を動かしている。

(3) 次世代へつなぐ夢のあるむらづくり

平成 22 年からは、県事業の活用により「棚田オーナー」への取り組みを開始した。これは、それまでの人的・精神的な交流中心の活動から、地域の農地を保全することによる農村の維持活動に一步踏み込んだもので、協議会活動の新たな取組として、今後の展開が特に注目される。

2. 農業生産面における特徴

(1) 協議会員等の経営の改善

これまでの活動は、消費者との交流の拡大による地域社会の活性化や生きがい創出に重点が置かれてきたため、基本的に料金の設定等は消費者の意向に沿う形で決められていた。平均的な一人あたり 1 泊の料金は、農業体験料 4,000 円前後＋食材費 1,500 円の計 5,500 円であり、平成 21 年は、432 名を受入れており、年間 2,376 千円程度の域内収入となった。農業外収入があることで、喜びややりがいを感じられるようになったと同時に、もらうお金以上におもてなしをしなければという責任感も生まれた。

また、味美会や、加工所での製造・販売活動により、年間 7,800 千円程度が地域収入になっており、農業体験料とともに農家収入の増につながっている。会員が活動している加工所では、米粉を使用した「米粉かりんとう」や「米粉のパウンドケーキ」などを製造しており、平成 20 年には近隣地域の仲間と一

緒に、秋田県の伝統食「こぎき練り（すりつぶしたもち米を煮て、砂糖と酢で味付けしたもの）」を後世に伝承したいとの思いから、現代風にアレンジして商品化した。商品名は「恋咲」といい、平成 21 年度の秋田県特産品開発コンクールで奨励賞を受賞している。



写真4 商品化した「恋咲」

(2) 後継者の育成確保

近年、農村部でも農作業を知らない子ども達が多くなっているが、ここ大森では、グリーン・ツーリズムの活動の性格上、若妻層や子ども達も参加し、家族ぐるみで活動することが多く、2世代目、3世代目が活動を通じて農作業を体験することができ、このことが後継者育成にもつながっている。

(3) 高齢者や女性の経営参画

農業体験や修学旅行の受入れでは、受入れた農家の家族全員が協力してもてなすことになる。そうした中で高齢者は、農村の伝承文化の語り手として重要な役割を担っており、縄ないや漬物づくりなどの体験では、欠かすことのできない役割を果たしている。



写真5 縄ない体験の様子

女性については、農業体験の受け入れの際、女性特有のソフトな対応により、訪問者がうち解けやすい環境を作り出しており、思い出の大きな部分を占める食事の提供も、高齢者や女性が男性以上の役割を果たしている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 環境美化意識の向上等

体験者等を受け入れる会員は人々を気持ちよく迎えるため、家の周囲を清潔に保つことが基本となっている。体験者等を迎えることが多くなるにつれ、地域住民のなかでも、地域内をきれいにしておく意識が芽生え、農家・非農家関係なく地域ぐるみで家や畑周りの整理、美化を進めている。

また、農家民宿を開業した会員は、自宅裏に広がる約 60ha の山林に、訪れた人に散策を楽しんでもらおうと林道を整備した。そこでは、自然観察や昆虫取り、山菜採りなどの体験メニューが行われ、山も見違えるほど整備された。

(2) コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等

田植え体験などでは、あぜ道に地域の高齢者がたたずんで、子ども達を微笑みながら見守るなど、高齢者のいきがい創出につながっている。地元子ども

達も、都市の子ども達との交流により精神的に成長している。

この大森の地に足をつけた地道な活動が、飾らない、ありのままの自然を提供し、それが都市と農村の人間の交流を発展させている。

(3) 地域への定住促進

都会で生活していた町出身者が退職後、夫婦で大森に移住し、野菜やハーブを作りながら本活動に参画しているケースもある。

都会に住む夫婦の友人や、その子ども達が大森を訪れた時、田んぼなどで農業体験をしてみたいとの要望があったことから、奥さんが町に相談したところ、この協議会の活動を紹介された。

それがきっかけで地域の高齢者からよもぎ餅づくりを教えてもらうなどの交流が生まれ、2年前からは協議会に加入し、自家菜園を活用して農業体験の受入を行うようになった。

この夫婦は、「都会生活では人との繋がりが薄かったが、協議会活動に参画したことにより、地域に溶け込むことができた。また、地域の自然のありがたさを体感することができ、移住してよかった。」と感想を述べている。